様式 C-7-2

自己評価報告書

平成 23 年 4 月 18 日現在

機関番号：32601
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2011
課題番号：20520301
研究課題名（和文） 2 月 6 日事件と「途方に暮れる」作家たち

研究課題名（英文）The 6 February 1934 crisis and the disoriented writers

研究代表者
濱野　耕一郎（HAMANO KOICHIRO）
青山学院大学・文学部・准教授
研究者番号：80383496

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：ヨーロッパ文学（英文学をのぞく）
キーワード：仏文学

１．研究計画の概要

1934 年 2 月 6 日の極右グループの暴動（通称「2 月 6 日事件」）は、イタリア、ドイツにつづくフランスのファシズム化を予感させる衝撃的な出来事であった。作家たちはこの事件を機に何を思い、いかなる態度を選び取ったのか。また、そうした選択は彼らの文学活動にどのような変化を強いることになったのか。作家たちの一般的な傾向を概観した後、数人の作家を個別に取り上げ、その動向を詳しく検討する。

２．研究の進捗状況

初年度は当初の予定（シュルレアリスムの動向分析）を変更し、政治的社会的事象への徹底した不介入主義を標榜していた作家たち（モンテルラン、マルタン・デュ・ガール）の動向に着目した。彼らが 2 月 6 日事件を機に態度を軟化させ、政治参加の可能性を示唆するにまで至る事実を踏まえ、この事件が 19 世紀末のドレフュス事件同様、作家たちの政治回帰を強く促した契機であったことを明らかにした。

初年度から第二年度にかけては、以上の成果を論文にまとめる一方、2 月 6 日事件をきっかけに反ファシズム闘争に参加し、人民戦線の代表的知識人と目されることになるアンドレ・シャンソンの動向も分析の対象とした。特に 2 月 6 日事件と、それに続く政治闘争によって引き裂かれる人々を描いた小説『懲役船』（1938-1939）に注目し、旺盛な政治活動の陰に隠れた文士シャンソンのジレンマを浮き彫りにしようとした。

シャンソン論の執筆は、フランス国立図書館で新聞 *Vendredi* を集中的に閲覧した第三年度の半ば過ぎまでずれこんだが、この作業と並行する形でドリュ・ラ・ロシェルの作品群の分析も進めた。ただし現在のところ、ドリュに関する具体的な成果を残すことはできていない。第四年度以降の課題としたい。

なお、本研究に取り組むきっかけとなったジョルジュ・バタイユの小説『空の青』（1935；1957）については、研究開始以前に発表した仏語論文を下敷きにして執筆した日本語論文と、小説冒頭部の新たな読みの可能性を探った仏語論文の計二本を世に問うている。

３．現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

（理由）

2 月 6 日事件後の作家たちの一般的傾向、シャンソンとバタイユという二人の作家の動向と、事件から間もなく彼らが残した文学テクストに関する分析結果は、すでに公表することができている。

４．今後の研究の推進方策

最終年度となる今年度は、ドリュについて、少なくとも論文執筆が開始できる段階まで、収集した文献資料の分析を進める。

５．　代表的な研究成果
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

Koichiro Hamano, « L'Introduction du *Bleu du ciel* », *Cahiers Bataille*, 査読あり, n° 1, 2011, pp. 67-74 ; 234-235.

Koichiro Hamano, « Le 6 février 1934 et les écrivains (II) : André Chamson », *Stella*, Université de Kyushu, 査読あり, n° 29, 2010, pp. 151-168.

濱野耕一郎「二月六日事件とバタイユ」、『水声通信』、査読なし、第 30 号、2009 年、pp. 120-131.

Koichiro Hamano, « Le 6 février 1934 et les écrivains (I) : hors de la tour », *Études françaises*, Université Aoyama Gakuin, 査読なし、n° 18, 2009, pp. 32-54.